広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	地域日本語教育における対話交流型クラスの可能性 一外国人市民と日本人市民をつなぐ試みを通して
Author(s)	淺田，岐依；小口，悠紀子
Citation	広島大学日本語教育研究 , 33 : 16 - 23
Issue Date	2023-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/53751
URL	https://doi.org/10.15027/53751
Right	Copyright (c) 2023 広島大学大学院人間社会科学研究科日本語教育学プログラム
Relation	

地域日本語教育における対話交流型クラスの可能性

―外国人市民と日本人市民をつなぐ試みを通して―

淺田岐依・小口悠紀子

The Potential of Dialogue-Exchange Classes in Community Japanese Language Education : Connecting Foreign Citizens to the Community

Kie ASADA, Yukiko KOGUCHI

キーワード：地域日本語教育，対話活動，相互理解，交流，地域参加

１．はじめに

細川（2017）は「ことばの教育」とは，「言語を教える」ことではなく，「ことばによって活動する」場をつくることだと述べている。本稿は，山口県周南市の地域の日本語教室において，「ことばによって活動する」場の創出を目指して 2020 年秋から開始した対話交流型クラスの活動について，外国人参加者 4 名のエピソードを中心にふりかえり，本活動が外国人と日本人市民（便宜上，以降「市民」と呼ぶ）をつなぐ場となっていたかどうか，実践の成果と今後の課題を報告するものである。

「出入国管理及び難民認定法」の改定，在留資格の拡大等で，近年日本で暮らす外国人が増えており，出入国在留管理庁が発表した 2022 年 6 月のデータによると，在留外国人は全国で 2,961,969 人と，10 年前の約 1.5 倍に増えている。本稿のフィールドである山口県周南市は，北部は中国山地沿いに山林と田園地帯が広がり，南部は瀬戸内海に面し，工業地帯を形成している。温暖な気候に恵まれ，人口 136,720 人（2022 年 9 月 30 日現在）のこのまちに暮らす外国人は，1,640 人（2022 年 9 月 30 日現在）であり，人口の 1.2%と日本全体から見ると決して多くはない。しかし，在留目的別にみると留学 20%，特別永住者 19%，技能実習 16%，永住者 13%（2022 年 9 月 30 日現在）で，このうち技能実習生は製造業に携わるものが多いものの，建設，清掃等々，多種に渡る。外国人の散住地域であることから，日本語教育関係者ではない地域住民とコミュニケーションをとることが，外国人が生活していく上で欠かせないものと考えられる。

文化庁が 2020 年に公開した「日本語教育の推進に関する施策を総合的かつ効果的に推進するための基本的な方針」（以下，基本方針）では，地域における日本語教育について「地域に在住する外国人が自立した言語使用者として生活していく上で必要となる日本語能力を身に付け，日本語で意思疎通を図り，生活できるように支援する必要がある」と言及されている。「増加し多様化する外国人を日本社会の一員として受け入れ，外国人が社会から孤立しないようにする」（文化庁，2020）ために，生活の場である地域では，外国人に対する日本語学習支援だけでなく，「マジョリティ側である日本人，日本社会を多文化に適応させるための地域日本語教室機能も併せてコーディネートする」（山田 2018:47）ことを目的とした地域日本語教室のコーディネーターの配置が全国的に進んでいる。

こうした背景から，山口県周南市の地域の日本語教室においても，生活日本語の習得を支援することを主な目的とした日本語講座だけでなく，外国人市民と地域をつなぐきっかけとなるようなクラスの新設について検討が行われ, 2020 年秋から地域の外国人と日本人を対象とした対話交流型クラスを設置することになった。筆者はこのクラスのコーディネーターを務めることとなったが，（１）外国人の散住地域における地域日本語教育に関する取り組みに関して，実践報告が十分行われていないこと，（２）今後，同じような活動を行う際には，さまざまな地域での実践報告の積み重ねが参考になることを踏まえ，2 年間の活動実践の報告を行う。

なお, 本稿の研究課題としては下記の 2 点を挙げる。

（１）対話交流型クラスは外国人と市民をつなぐ場として機能していたか。

（２）外国人参加者は地域での生活を送る中で対話交

流型クラスをどのように活かしていたか。

上記を述べた上で，今後の課題を明確にする。

２．対話交流型クラスについて

2.1　クラスの概要

対話交流型クラスは 2020 年 10 月から，JR 徳山駅から徒歩 5 分の周南市シビック交流センターで始まり，2 年目から徳山保健センターに移っている。当初は 4 月開始の予定であったが，新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため半年延期となった。

対話交流型クラスの目的は，（1）外国人市民の日本語運用力と発信力を養うこと，（2）日本人市民の多文化共生意識を養うことである。（2）を高めるために，クラス開始前の 9 月に日本人市民を対象とした「やさしい日本語講座」を開催し，外国人市民と対話をするときに役に立つ簡単な日本語と，相手を思いやる寄り添いと傾聴について学ぶ機会を設けた。この講座の中で，筆者もクラスの目的を説明したほか，日本語教育の専門的知識がなくても会話のパートナーとして参加できること，対話活動における留意点などを話した。

2.2　クラスの参加者

クラスに参加するのは，（1）日本語学習支援団体「日本語クラブ周南」に所属しているスタッフ，（2）ボランティアとして市民から募った日本人会話パートナー，（3）周南地域在住の外国人である。筆者（筆頭）はこのうち（1）のスタッフであり，クラスのコーディネーター業務を任されていた。（3）の外国人は事前申込不要とし，自由に参加してもらう形態とした。

初年度である 2020 年は，半年間で 20 回開催し，延べ人数として日本人 241 名，外国人 8 カ国 133 人が参加した。2021 年はコロナウイルス感染拡大の影響で休止していた時期もあったが，年間で 22 回開催し，参加延べ人数として日本人が 157 人，外国人が 7 カ国 117 人であった。そして，3 年目となる 2022 年は，月 2 回の定期開催として年間 22 回の予定で開催した。

2.3　クラスの運営と参加費

運営に関して，2020 年から 2021 年度は，周南市の後援により，会場の無料提供を受けた。続く 2022 年度からは，団体が市の委託を受けて地域での日本語学習支援に取り組む形となり，運営や教材にかかわる部分は市からの委託金を利用できるようになった。この背景には，2019 年に日本語教育に係る法律が整備され，自治体の地域日本語教育に係る責務が明言化されたこと，さらに 2020 年度から山口県が文化庁の補助を受けて地域日本語教育推進事業に取り組み始めたことがある。なお，クラス開設当初より，成人の外国人参加者からのみ，1 回 100 円の参加料を徴収しており，この参加料は委託金と合わせて教室運営や教材に係る費用の他，特別講座の講師料にも充てている。

2.4　活動の流れ

1 回のクラスは 1 時間半で，対話活動，振り返り，全体共有という流れで実施している。自由参加のため，回によって参加人数にばらつきがあるが，外国人参加者と日本人参加者混合で，大体 3～4 人のグループに分かれて対話活動を行なっている。

最初に，その日の担当スタッフがファシリテーターとなって対話のトピックを提示し，話しやすいようにいくつか例を挙げるなどして活動の導入をし，その後は各グループに任せて対話活動を行う。このファシリテーター役は，2021 年度まではコーディネーターである筆者が大半を担当していたが，2022 年度以降は活動に慣れたスタッフと分担して行っている。

対話活動で扱うトピックは様々で，「今まで食べた一番おいしい料理」や「買い物について」，「おすすめの過ごし方」「健康法」など，情報共有や文化紹介を主にしたものもあれば，「得意なこと・苦手なこと」「今年の目標」など，個人的なことを紹介するものもある。

1 時間程度対話活動をした頃振り返りシートを配って「話したこと，知ったこと」を記述してもらう。そして，最後の 10 分～15 分にそれを発表し，全体共有を図る。全体共有の時間には，別のグループから質問が出ることもある。担当スタッフは，発表された内容について，白板に日本語でまとめ直すとともに，発表者に内容に関するフィードバックや表現・形式に対するフィードバックを行う。

本活動は，グループでの交流発話と発表という，二種類の発話機会を参加者が得ることで，それぞれの場になれ，日本語能力を向上させることをねらいとしている。発表に慣れた参加者の中には，市内で開催された「外国人による日本語弁論大会」に出場する者もいる。クラスが開設されて 2 年目に当たる 2021 年度には，クラスで学んだ外国人が弁論大会で優勝から 3 位までを占めることができ，活動の成果があらわれてい

ると感じている。

2.5　活動の留意点

日本人の参加希望者も基本的には連絡不要ではあるが，学習支援が初めてという人にはクラスの目的や対話の際に気をつけてほしいことなどを理解した上で活動に参加してもらうようにしている。各グループでの対話活動では，日本人会話パートナーがファシリテーターになることが多いが，一方的に自分の言いたいことを伝えるのではなく，表情などから対話相手が理解できているかどうかの程度を推察しながら活動をするなど，相互理解を目指してほしいとお願いしている。うまく話が展開しているかどうかは，コーディネーターである筆者が観察をし，できていないグループには活動のフォローに入ることもある。いわゆる「やさしい日本語」も相手の理解度によって使用するが，少し難しくてもより適切な日本語表現を学ぼうとする外国人参加者もいるため，すべてを易しくすることはしない。表現を繰り返したり，言い換えたり，時にはスマホなどの媒体や筆記なども用いてお互いの理解の助けにする。

初年度から参加している会話パートナーのZは，*「まず，話が途切れないようにしないといけないなということと，相手がわかってるかなというのをはかりながら，自分の言い方って，今のどうかなとか，言ったことを振り返ったり，相手の反応とかは，気をつけている」*と話す。

３．外国人参加者のクラスとのかかわり

本節では，外国人参加者のクラスとのかかわりについて，参加者の語り，筆者の内省や活動報告[1)]を参照しながら，振り返る。なお，参加者の語りについては筆者がクラスの中で聞き取りを行い，本稿執筆にあたり必要に応じてフォローアップの確認を行った。4 名とも 2021 年度までは継続的に参加していたが，2022 年に帰国や転居によって周南地域を離れている。

3.1　ベトナム人技能実習生　A

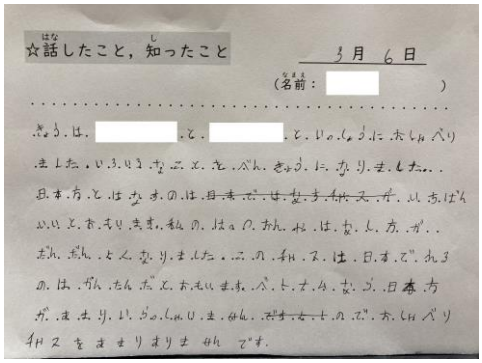
技能実習生として来日したAが対話交流型クラスに参加し始めたのは，実習 4 年目に入った頃であった。周南市から東へ約 30 キロ離れた町に住んでいたものの，実習先の後輩 D（後出）に誘われたことをきっかけにクラスに参加するようになった。A は，非常に勤勉で，自分なりの考えをしっかりと持っている印象の参加者であった。ただし，日本人に自分の思いを日本語で伝えることについては自信がなく躊躇すると話しており，クラスに参加することでその練習の機会を増やしたいと考えていたようである。

A が参加し始めて 2 か月ほど経ったころ，「日本・日本人のなぜ？日本へのメッセージ」というトピックで話をする回があった。この時，ベトナム出身の参加者たちから，共通して，日本人は近所づきあいが少ないとの意見が出た。その中で A は，道端で転んでけがをしたおじいさんに声をかけ，近くの家を訪ねて 119 番に電話をかけてもらい，救急車が来るまで付き添ったという話をした。さらに，多くの日本人が側を通っていたのに，誰もおじいさんに声をかけなかったのが悲しかったという思いも伝えてくれた。

A は，クラスでこの話をしたのは，自分がとった行動が日本の社会の中で受け入れられることであるかを確認するためだと述べている。これに対し，困っている人に声をかけたこと，初めて訪ねた家の日本人に事情を話すことができたこと，そうした勇気を出した A の一連の行動を，参加していた日本人全てが高く評価した。このことから，A は大きな自信を得ることができたようであった。この回の終わりに A は「話したこと，知ったこと」として，「自分の体験を話しました。私のやり方が正しいかどうかを確認できました。そして，Z さん，Y さん，X さんから色々なことを教えてもらいました。」と記している。また，後日，おじいさんの家族が A の実習先を訪ねて来てくれ，お礼を言われたことも嬉しそうに話してくれた。

一方で，A は弁論大会のテーマ探しの会話の中で，知らない老人に救われたという出来事を共有したこともある。それは，過去に A が実習生同士の関係がぎくしゃくして辛くなり，港で泣いていたとき，一人の老人が「がんばろう」と声をかけてくれたという経験についてであった。A はその人のお陰で辛い時期を乗り越えられたと語っており，大変感謝しているようであった。

このように，A の語りからは，技能実習生として来日した A が，地域の方とふれあう経験を大切にしながら生活している様子が伝わってくる。


☆話したこと，知ったこと　3月 6日

（名前：　　）

写真１．Ａによるコメントシート

Ａは帰国前のクラス活動の振り返りにおいて「日本の方と話すのは一番いいと思います。私の発音や話し方がだんだん良くなりました。このチャンスは日本で得るのは簡単だと思います。ベトナムには日本人があまりいないのでおしゃべりのチャンスがあまりありません。」（筆者が一部修正）と，自分の成長とクラスの意義を書いており，クラスにきて日本人と対話によって交流するという経験そのものが自身にとっての学びにつながると捉えているようであった。

3.2　マレーシア人　Ｂとその家族

Ｂは夫が日本の会社にエンジニアとして就職したことを機に，4 人の子どもを伴って来日した。周南市で 5 人目を出産し，出産後は周りの日本人の助けを時折得ながら生活をしていた。

2021 年に周南市の国際交流サロンという団体と共同で，外国人市民を講師に招き，その国の言葉や文化を一般市民が学ぶという企画を立てた。これに伴い，クラスで講師役を募ったところ，Ｂも「ぜひ自分の国のことを知ってもらいたい」と立候補し，講師役を引き受けることになった。どんな言葉を教えるか，どんな文化をどのように知ってもらうかなど，ほかの講師たちと一緒にクラスで 2～3 週にわたってアイデアを出し，クラス内でリハーサルも行った。Ｂとその家族は，マレー語を歌に合わせて覚えてもらおうと計画をし，準備・練習を重ねた。

この企画は，「外国語で気軽にあいさつしてみま専科」という名前で実施され，マレーシア，インド，ベトナム，中国，韓国出身の計 11 人が講師役となって国の言語や文化を紹介した。一般参加者は小学生から年配者まで非常に幅広く，外国人講師の説明に熱心に耳を傾けていた。Ｂとその家族は，マレーシアでよく遊ぶという玩具や，食べ物のサンプルなどを作り，紹介した。またＢの子どもたちは，参加者に玩具の遊び方について実演しながら紹介していた。

写真２．Ｂと家族によるマレーシア文化の紹介

また，別の日に筆者はＢからこんな電話相談を受けた。それは，お世話になっていた近所のご高齢の方が亡くなったことを知り，お礼とお別れを言いに行きたいが，どうしたらよいかという日本の風習を尋ねるものであった。葬儀には参列できなかったとのことだったので，お花を持ってご挨拶に伺ったらどうかと提案したところ，その後，お宅に伺い，ご家族にも挨拶ができたと報告があった。

これら 2 つのエピソードに代表されるように，Ｂは対話交流型クラスを日本の文化風習を知る場としてだけではなく，日本人に自国の文化を紹介する一つの機会として捉えていることがうかがえる。また，クラスの内外で幅広い世代の日本人と広く交流しているのは，家族で滞在しているという点も関係している可能性がある。

3.3　インド人エンジニア　Ｃ

Ｃは九州の日本語学校で日本語を学び，エンジニアとしての就職を機に周南市にやって来た。建設会社で仕事をしていたＣは，日本の耐震技術などを学んで帰国し，母国に貢献したいという夢を持つ。

Ｃがクラスに参加していた 2 年間で一番印象に残っていることとして答えたのは，警察官と元消防士によるビジターセッションであった。これは，日本で安全に暮らすための話をしてもらうことを目的に，警察官や元消防士の方を招いた取り組みである。例えば，警察官のビジターセッションの場合，在留カードや，パスポート，通帳などを他人に貸さないこと，また，自転車や車の動きを予測することなどについて，詳しい説明を受けた。その際には，反射材や，交通安全のファイルなどももらい，夜に反射材がライトでどう光る

のかについても学んだ。外国人からの質問に対して回答してもらう時間も設け，「自転車にひとりしか乗ってはいけないのは，ブレーキがふたり乗りにはきかないから」であること，でも，「小さい子どもは補助具をつけたり，おんぶをしたりすればいっしょに乗ることができる」ことなどの説明を受けた。

このビジターセッションの前週に，参加者が自分で質問できるように，日頃疑問に思っていることや困っていること，知りたいことなどについて話すという対話活動を行った。C は同国人の友人のところに知らない日本人から電話がかかってきて困ったことがあり，どうすればいいのかを聞きたいと話していた。グループ内で事情を確認し，スムーズに質問ができるように練習を行ったこともあり，C はセッションの当日，自分で質問ができた。警察官の方も，外国人市民からの質問に答えるのは初めてのことだったようで，できるだけわかりやすい表現にして，丁寧に回答してくださった。

写真３． 警察官によるビジターセッション

本クラスでは，警察官や元消防士の他，防災士，折り紙や書道の専門家によるビジターセッションなどを実施しているが，事前の対話交流型クラスにおいて，専門家に尋ねたいことをあらかじめトピックとして取り上げることもしており，事前に準備をすることで外国人たちは自信を持って質問ができたと考える。

C にとって，クラスのこのような機会は，日本語を用いながら日常的には聞くことができない情報を専門家から学ぶ機会にもなったと考えられる。

3.4 ベトナム人技能実習生 D

D は技能実習生として来日し，クラスには知人に誘われて参加し始めた。クラスで実施する活動においてリーダー的な役目を果たすなど，徐々に積極的な参加が見られるようになり，先述の A をクラスに誘ったのも D である。その後，特定技能資格を取得し，新たな職に就き親族が暮らす地域へ転居するまでクラスに定期的に通っていた。

D が参加し始めた初期の頃は，日本人会話パートナーも外国人との交流が初めてだという人が多く，個人的に食事や行楽地に誘われる機会も多かった。最初に誘われたときは，1，2 回クラスで会った程度のまだよく知らない日本人と一緒に出かけることに慎重になっていたようで，筆者が相談を受けることもあった。しかし，回を重ねるごとに，そうした警戒も溶け，教室内外で積極的に交流を進めていった。

特に親しくしていた会話パートナーの Y は，D たちとのかかわりを次のように話している。

「今は，みんな日本語がうまい人が多いじゃないですか。自分たちが考えをもってやってらっしゃるので，すごいなと思うんです。そうすると私とかが手助けするようなことは，ただ話だけじゃなくて，国のおいしいものを作ろうかとか。私も色々作って，色々作りたかったんですけどね，彼女たちはベトナムの料理を食べさせてあげたい，今回は日本料理でいこうと言っても，いやもう，私たちに食べてもらいたいものがいっぱいあるからと。」

このような交流を通して，Y の家族や，Y の知人に至るまで広く交友関係を広げていった。その他，D が身体の不調で不安になったときには Y が一緒に病院についていくこともあったそうである。元看護師だった Y は外国人の心の健康が気になるようで，今も時々電話をしてくる D に*「頑張って，一人で悩んで，うじうじしているんなら，私に全部言いなさいって。助けられるかどうかわからないけども，一人で悩んで寝られなくなったら大変だから，そんなことは絶対ダメよって。わかった，連絡しま～すって言ってますけどね」*と，新しい環境で頑張る D の心の支えになりたいと願っている。D も，*「日本に親族が住んでいなかったら Y から遠く離れたくなかった」*と話しており，家族のような存在を見つけたようである。

また D はクラスに参加して多くの日本人と知り合えて嬉しかったとも話しており，対話交流型クラスが山口県で安心して生活する土台の一部分になれたのだと考える。

４．考察

本節では外国人参加者のクラスとのかかわりを通して，（1）対話交流型クラスは外国人と市民をつなぐ

場として機能していたか，（2）外国人参加者は地域での生活を送る中で対話交流型クラスをどのように活かしていたか，という二つの視点から考察を行う。

4.1　対話交流型クラスは外国人と市民をつなぐ場として機能していたか

まず，対話交流型クラスは外国人と市民をつなぐ場として機能していたかという点に関して，クラスの参加者であるA，B，C，Dの語りや様子から，「地域で暮らす方（偶然出会った地域住民，近所の方）」，「企画への参加者（地域住民）」，「ビジターセッションの講演者」，「日本人会話パートナー」とのつながりを生み出したり，かかわろうとする気持ちを持つ参加者を支援したりする場として機能していたと考える。例えば，Aの場合，偶然出会った地域住民との交流自体は対話交流型クラスが生み出したものではないが，そこでの行動を確認したり，評価を受けたりする場としてクラスが機能していることは，Aの地域住民とかかわろうとする気持ちを支え，その後の行動につながったと言えるだろう。

一方で，日本人会話パートナーとの交流をきっかけに，その知人にまで交友関係を広げていったDのような例は，観察した限りそれほど多く見られなかった。ただし，コーディネーターである筆者のもとには，Bの事例にあったように，外国人参加者から困りごとに関する相談が寄せられることが度々あった。つまり，クラスに参加した外国人の中には，コーディネーターや日本人会話パートナーを困った時の頼れる日本人として認識している者もいるようである。今後は，「外国語で気軽にあいさつしてみま専科」のような外国人が当事者としてかかわることができる日本人市民との交流企画を取り入れつつ，地域に頼れる日本人を増やしていくための仕掛けも考えていきたい。

4.2　外国人参加者は地域での生活を送る中で対話交流型クラスをどのように活かしていたか

次に，外国人参加者は地域での生活を送る中で対話交流型クラスをどのように活かしていたかという課題について，A，B，C，Dの語りや様子から，（1）自身の振る舞いを確認したり，評価を受けたりする場，（2）自文化や慣習を紹介する場，（3）日本文化や慣習を知る場，相談する場，（4）日本で安全な生活を送るための専門知識を得る場，（5）信頼できる関係性を築く場の5つが見られた。

当初，対話交流型クラスを設立する際には，先述の通り，（1）外国人市民の日本語運用力と発信力を養うこと，（2）日本人市民の多文化共生意識を養うことを目的として掲げており，筆者は外国人参加者側がどのようにクラスを活用するかというところまで考えが及んでいなかった。しかし，今回，外国人参加者への聞き取りやクラスのふりかえりを通して，日本人とのかかわりが欠かせない外国人散住地域で，心地よい生活を送るために，主体的に対話交流型クラスを活用しようとしているそれぞれの外国人市民の姿が浮かんできた。地域日本語教育における対話交流型クラスが果たす役割は，日本語習得の支援に限らず，多様に存在することが分かった。

5．対話交流型クラスの実践における今後の課題

最後に本節では，対話交流型クラスの実践において見えてきた今後の課題についてまとめる。

5.1　トピックについて

まず，対話活動で扱うトピックについて，誰でもすぐに話ができるようなもの，例えば「趣味」「得意なこと・苦手なこと」や「食べもの」「行きたい場所」などを多く扱ってきたが，自分の考えや疑問などを話すことができるようなトピックも加え，外国人参加者の内面をより理解できるようにする工夫も必要だと考える。

その理由は，本実践を通して，対話の深度はトピックによって変わると感じたからである。例えば，Aが話した体験談も「日本・日本人のなぜ？日本へのメッセージ」というトピックであったため，自分の行為が日本人から見てどうなのか，自分の行為は良かったのかということを日本人に確認でき，日本人参加者も改めて現在の日本の状況，日本人の心境まで考えることができた。Cも，警察の人に率直な質問ができる回であったからこそ「困った経験」を自ら話すことができ，解決に近づいたことがクラスの一番の思い出になったのである。これらの発話は前者のようなトピックの際にはなかなか産出されなかったことから，トピックの設定や配置の順序，バランスなどは今後検討が必要であると考える。

トピックに関しては，外国人参加者から提案を受けたこともあったが，「知りたい」「教えてほしい」というよりは，自分の国のことを「知ってほしい」「文化を紹介したい」ということも多かった。DがYたちに「ベトナム料理を食べてほしい」と思ったのも自分

たちのことをより知ってもらいたいと思ったからであろう。このような外国人参加者の「声」をクラスで拾い，クラスを変えていくことは，いずれ社会へ「声」を届けることにもつながっていくように思える。

このような反省を生かし，2022 年度の初回には，全員で対話交流型クラスに名前をつけようと話し合い，「さくら会」に決定した。また，今年度の対話交流型クラスをつくる活動として，みんなで話したいことややりたいことを出し合った。このうち，「マレーシアの文化紹介」「旅行のことを話す」「寺社参拝」など，いくつかは既に実現できている。

写真４． 対話交流型クラスをつくる活動

また，2022 年度から対話のトピックは SNS を使って活動の 3 日前に全員に送付し，参加の準備ができるようにしている。会話パートナーの W も*「あらかじめトピックがわかると，グループワークを進行する心構えもでき，ありがたい」*と話しているが，他の会話パートナーも「今まで食べた一番おいしい料理」というトピックの際には，写真を印刷して持参してくださりグループ内での話も弾んでいた。

5.2　運営について

対話交流型クラスを始めた当初は毎週日曜日に開催していたが，3 年目の 2022 年度は第 2・第 4 日曜日の月 2 回の開催にしている。スタッフも日本人会話パートナーもそして外国人参加者も，クラスがない日曜日はプライベートの用事を入れることができ，ちょうどよい頻度のように感じている。当初よりも参加率も上がっている。特別講師を招くビジターセッションを行うときには，その事前学習も目的とした対話活動が 2 週間前になり期間が空いてしまう欠点があるが，また新たな気持ちで講師の話を聞くことができ，それほどの不都合はないように感じている。

その他運営上の課題としては，スタッフと日本人会話パートナー全体での振り返りの時間を隔月 1 回程度はとって，外国人参加者にとってより話しやすいパートナーになるための気づきを共有し，より充実した対話活動になるように全員で考えていきたいと思っている。しかしながら，イベントや特別講座もはさむため，クラス実施後に決まった時間をとるのが難しいのが現状である。

参加者数に関しては，クラスを日曜日午前に設定しているため，土曜日・日曜日に就労シフトが多い外国人技能実習生や，休日にアルバイトをする留学生の参加が少ない。外国人参加者も日本人とだけではなく，他の国や，仕事や立場の違う人と話すいい機会になっているので，今後，時間を都合してでも参加したいと思ってもらえるようなクラスになるよう考えたい。

5.3　地域との連携について

地域とのつながりという点では，別団体と合同でイベント企画をし，クラスをあげて参加するようにしている。昨秋にも市の国際交流サロンと共同で実施した「わくわく♫ 動物園ワールドツアー　やさしい日本語でガイド体験」は，一般市民がやさしい日本語で外国人参加者を案内するというものであった。公募して企画に参加してくれた日本人市民のアンケートからは「異国で学ぶ姿が印象的だった」や「違う国の人と仲が深まった」「日本語で会話もスムーズにでき，とても良い交流ができた」と外国人と日本語でコミュニケーションをとる楽しさを体感してもらえた。外国人参加者も「親切なボランティアと日本人の方と話ができて良かった」「とても感動です。このような活動があれば日本人と深い交流ができます」などの感想があった。このように，イベントを通しても多文化共生につながる意識は感じることができるものの，これが恒常的なものになるよう，外国人・日本人どちらもお互いに相手を理解しようとする気持ちをもって，誰もが暮らしやすい地域社会になるよう，これからも市民同士をつなげていきたい。

６．おわりに

今後，対話交流型クラスが，「本当に話したいこと」を日本語で言える場，いろいろな話題を提供して話し合う場（御舘，仙田ほか，2010）になり，外国人参加

者が日本人市民との相互理解を広げるきっかけとなることを目指したい。また，日本人市民は，外国人との交流を通して，多文化とともに多様な考え方を知ることができると同時に，日本や自分について改めて振り返る機会にすることができると考える。

会話パートナーのZは，*「やっぱり日頃から外国の方と触れ合う機会があまりないから，何となく特別視というか，ちょっとこう，悪い言い方をするとちょっと引くということがあったと思うんですけど，こうして，普通に話をしたり，接することによって，そういうものはなくなって，普通に接することができるようになったなと思います。（中略）外国の方も，こう躊躇されているような空気感がだんだんなくなって，普通に友人というか友だちと話すような感じで話すようになってるかなという気がします。構えがなくなるというか。」*と話してくれた。

Zが言うように，日本人と外国人のどちらにもある「構え」が，対話の機会を重ねることによって徐々になくなってくるのであろう。

御舘・仙田ほか（2010）には「日本語教室に参加する日本人が増えることによって，日本語使用環境が職場や地域に広がっていく可能性も増える。そして，外国人住民が接触するすべての日本人が彼らに寄り添って日本語で対話することを促進するような社会が実現すれば，外国人住民にとっても暮らしやすい社会となるはず」とある。今後も対話交流型クラスが「出会い，知り合い，共に活動・感動を作っていく場」になっていくようにし，ボランティア一人ひとりも自分が持っているゆるやかなネットワークを生かし，外国人参加者を日本語教室の外の世界，地域社会とつなげていく役割（御舘・仙田ほか，2010）を果たしてもらえるようにしていきたい。

注

1）https://www.facebook.com/shunan.nihongo

謝辞

本稿執筆にあたり，一緒に活動をしている対話交流型クラスのスタッフ（山田典生氏，中山裕子氏），そして会話パートナーの皆様と外国人参加者の皆様に感謝申し上げます。
なお，本研究はJSPS科研費21K00642の支援を受けています。

参考文献

御舘久里恵，仙田武司，中河和子，吉田聖子，米勢治子（2010）『外国人と対話しよう！にほんごボランティア手帖』凡人社.

文化庁（2020）「日本語教育の推進に関する施策を総合的かつ効果的に推進するための基本的な方針」https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/other/suishin_houritsu/pdf/92327601_02.pdf

細川英雄（2017）「言語・文化・アイデンティティの壁を越えて」『かかわることば　参加し対話する教育・研究へのいざない』佐藤慎司・佐伯胖（編），pp191-211，東京大学出版会.

山田泉（2018）「「多文化共生社会」再考」『多文化共生　人が変わる、社会を変える』松尾慎（編著），pp3-50，凡人社.

資料

周南市ホームページ
https://www.city.shunan.lg.jp/soshiki/20/2604.htht（2022年11月30日閲覧）